

ドキュリテュノート

No.6 2017

- ✚ 独立レジェンド／林武
- ✚ 独立キーパーソン／大津英敏
- ✚ アトリエ探偵団／金森良泰
- ✚ つぶやき生の声！
- ✚ 六本木遊歩
- ✚ 独立人－ひとりたつひと－／齋藤研



独立美術協会小史

【誕生－初期】(1930－1959)

1930年11月1日、清水登之(43歳)、鈴木保徳(39歳)、川口軌外(38歳)、小島善太郎(38歳)、児島善三郎(37歳)、中山巍(37歳)、鈴木亜夫(36歳)、里見勝蔵(35歳)、高畠達四郎(35歳)、林重義(34歳)、伊藤廉(32歳)、林武(32歳)、福沢一郎(32歳)、三岸好太郎(28歳)という14名の気鋭の画家たちが独立美術協会を設立し、翌年1月には東京府美術館で「第1回独立展」を開催した。

初期段階で野口弥太郎、須田國太郎、小林和作、海老原喜之助、鳥海青児らが会員として迎えられる。

第1回展は3,058点、第2回展4,853点、第3回展では5,000点を超える搬入点数があったと記録されており、他の団体を超える「熱狂的な支持」を得ていたことが分かる。

この期に独立は近代史に輝く画家集団として確固たる地位を築き、「独立展」は俳句の「季語」になった。

【中期】(1960－1984)

現代の洋画壇でも中心的な活躍を続けている会員が、この頃に新会員となって注目を集め始めた。画壇の芥川賞といわれた安井賞展には、独立所属の画家が多く入選・受賞した。その他昭和会展、安田火災美術財団奨励賞展など多くのコンクールや芸術賞で受賞してきた。また文化庁芸術家在外研修員として選出された画家も多く、活躍が続く。

【現在】(1985－)

独立展以外の活動では、この期も様々なコンクールで受賞したり、文化庁芸術家在外研修員に選ばれる独立所属画家の輩出が続く。また、毎年6月を中心に銀座界隈の画廊で独立展出品者の展覧会が頻繁に開催され、美術界の話題になっている。

一方独立展内部の作品には、抽象作品だけでなく具象作品にも半立体的な作品が現れたり、写実的な傾向の作品やコンピュータを利用した作品も増えて表現がより多様化して行った。

独立展は、こうした新しく生まれようとする優れた才能には時を選ばず評価してきた。また「審査することは、同時に審査されること」という自覚を持って運営し、現在にいたる。

批評家・学芸員・会員によるギャラリートークも好評を博している。





第85回独立展地方巡回展 予告
京都展 → 2017年11月14日(火)~19日(日)
大坂展 → 2017年11月21日(火)~26日(日)
名古屋展 → 2018年1月4日(木)~8日(月)
福岡展 → 2018年3月13日(火)~18日(日)
北海道展 → 2018年4月1日(日)~12日(木)

第86回独立展 予告!
2018年10月17日(水)~29日(月)
国立新美術館 収入日／10月4日・5日
独立春季選抜展 予告!
2018年3月24日(土)~31日(土)
東京都美術館

独立ノート第6号

発行日／2017年10月1日

発行者／独立美術協会

〒141-0031 東京都品川区五反田2-13-8-507

Tel.03-3490-5881 Fax.03-6420-0026

E-mail:dokuritsu@ceres.ocn.ne.jp URL:<http://www.dokuritsuten.com>

印刷／A-1ネットワーク・デザイン／八武崎勢津美

編集後記 何度も中止の危機に瀕しながら、建築家ヘルツォークは今年ドイツ・ハンブルクに凝りに凝ったコンサートホールを完成させた。曰く「建築とは人々がある場所の未来を信じ、その場所に投資することで初めて成立する、本来楽観的なものだ」。桁は違い過ぎるが、この独立ノートも独立展の未来を信じ、こだわり、ギリギリまで粘った。ここから、嬉しい対話が広がることを願うばかり。

独立ノート第6号をお届けします。昨年あたりから新しいスタッフで動き出し、記事のそれぞれが活き活きと有機的につながってきたのを感じます。この「独立」という画家たちの集まりがこれからさらに何を目指して行くのか、しっかりご覧いただきたいと思います。

事務所委員 今井信吾

目次

| | |
|--------------------|-----|
| + 独立美術協会小史 | 表紙裏 |
| + 独立ノート第6号発刊にあたり | 1 |
| + 独立レジェンド／林武 | 2 |
| + 独立キーパーソン／大津英敏が語る | 4 |
| + アトリエ探偵団／金森良泰 | 6 |
| + つぶやき生の声 | 8 |
| + 六本木遊歩 | 10 |
| + 独立ホットニュース | 12 |
| + 独立人-ひとりたつひと-/齋藤研 | 13 |
| + 第85回独立展地方巡回展予定 | 裏表紙 |

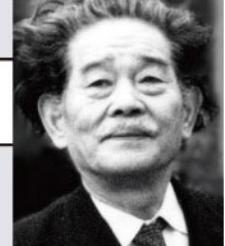
制作：独立ノート編集室

浅見千鶴 阿部栄一 高松和樹 津川めぐ美 佃彰一郎 中村光幸
浜松繁雄 松原潤 米田和秀

顧問：今井信吾 塚本聰

表紙：林武『梳る女』大原美術館収蔵

描くことは戦い

林武 はやしたけし
Takeshi HAYASHI

1961年、東京藝術大学教授の林武は、油絵科専攻科の教室で学生の人物作品をじっと見つめ、「青い色を出しなさい」と言った。差し出された9号チューブのウルトラマリン・ディープを人物の首の部分に押し付け、力強くギューア、ギューアと絵の具を絞り出し、ただ一言「これだけの青が必要だね。パックにも」と言って教室を後にした。それをどうすることも出来ず、学生はそこに立ち尽くしたという。教室の緊迫感がひしひしと伝わってくる。この作品は56年後の今もそのまま残されている。奥谷博27歳の作「女の像」(図1)である。奥谷は後年、この青は空気の描ける色であり、色彩の対比効果のことであり、人物とパックとの関係も掴めると言う事なのだろうとの考えに至った。描くことが戦いだった65歳の林武から、絵描きの卵への以心伝心であった。

林武は1896年(明治29年)東京市麹町区生まれ、ほとんど独学で洋画を習得し、日本洋画界に大きな足跡を残した画家であり、独立美術協会を立ち上げた創立会員である。幼少時、貧窮の中で家計を助けながら勉学をつづけ、1921年(大正10年)25歳の時に新婚の幹子夫人を描いた《婦人像》が二科展初入選、樗牛賞を得る。翌年《本を持てる婦人像》で二科賞を受賞、有望な新人画家として頭角を現した。

1926年(大正15年)に佐伯祐三・里見勝蔵・前田寛治らが結成した1930年協会に参加、1930年11月には同志と共に独立美術協会を創立した。その間、慢性胃潰瘍を再発し、瀕死状態から奇跡的に回復するということがあった。入院費のない林の為に、画友らが小品展を開き、売上金全額を援助するなど、篤い友情で結束していた。

「何よりも立派な仕事がし度い。小さな反抗や野心からではなく、緊張した力ある生活を送り度い。時代を同じくする気持の融合、同志の堅い友情と決意、而して又それにつづくより若い人々の漲る真剣さ、元氣。必然の勢を以って遂に今日に至った。蛹を割るには充分の成熟を遂げて、独立飛躍の第一歩を吾等は今踏み出そうとして居る。自由なる大地。未知の鴻野は眼前に展けて居る。」
(「独立の詞」)

1930年第1回独立展出品作品は「裸婦」(図2)。独立美術協会の仲間の中では1人だけ渡欧経験のない林は、國版を頼りにフォーヴィスムを研究し、ドランの影響を強く受けていた。

1934年、念願の渡欧を果たし、セザンヌ、マチス、ドラン、モディリアニ等に刺激され平面化と単純化を模索すると共に、ボリュームの真実性(立体化)をも求めようとした。日中戦争から大東亜戦争の間、生活の為にも絵を描き切らねばならなかつたが、制作は行き詰まり、さらに胃潰瘍の悪化で生死をさまよう。そういう状況でも構図研究に没頭し、相反する二つが相半ばして一つとなる「つりあい画論」、具象のための頂点・基点・中心点の模索等々、常識を突き崩し歪みや破綻を取り込もうとする、難解にして魅力的な林武の絵画論を形成していく。(著書『美に生きる』講談社現代新書に詳しい)

1949年(昭和24年)「梳る女」(図3)で毎日美術賞を受け、人気画家の道を歩み始める。1952年東京芸術大学教授に就任。1967年文化勲章受章。1975年(昭和50年)死去。享年78歳。



図1 奥谷博「女の像」1961年

林の制作は一貫してカンバスとの戦いであった。時間は二の次で何度も描いては削り落とすことを繰り返し、納得ゆくまで画面に取り組む。床には絵の具とボロ切れが散乱し、足の踏み場もないくらいになったという。「とにかく僕は、半世紀の間、ただ一途に絵をかいて今日に至った。描きあげてきた作品の一つ一つは、それぞれに完成品である。けれども、描く僕自身は、永久に未完なのだ。」

物故会員・大久保泰の林武回想。

「私が個展を開いた時、早速、林夫妻が会場に見えて、20号を画商の言い値で売約してくれた。駆け出し時代の私には、初日に、しかも大きい20号に赤札がつくとは、景気のいい話でありがたかった。林のまわりには、若い画家が集まっていた。私にすら個展の初日に進んで景気をつけてくれるのだから、若い画家の個展でも、精神的に物質的に応援していたことであろう。新進画家を祝福し激励するのは、若い画家の苦しみを知り尽くしていたからである。」

林の描くことは戦いの精神と面倒見の良さ、そして熱い独立愛は、直接薰陶を受けた奥谷博ら多くの現会員に引き継がれている。独立レジェンドたる所以である。

「ノートルダム」1960年 愛知県美術館蔵

図3 「梳る女」1949年
大原美術館蔵(表紙作品)

代表作「梳る女」のこと

戦後日本洋画の記念碑的作品が毎日美術賞受賞の「梳る女」であり、そのモデルを務めたのが星女嬢である。「まったく星女さんは、戦後、私が人物を描きたいときに奇しくも現れたミューズだった。」

母、星女の思い出

菊地栄

私の母、星女が林先生のモデルになったのは、星女の父である坂上(本名・阪上)眞一郎が設立した建設社が、雑誌「独立美術」を発

行していたご縁による。父親が戦前から美術書を出版していた関係から、家に三岸好太郎の原画があったという環境で星女は育った。星女の父、眞一郎はヨーロッパ系の血をひくいわゆるダブルとして生まれたので、母には四分の一、西洋の血が混じっている。エキゾチックな小さな顔に、長い首。そんな星女の顔立ちが芸術家の目にはひときわ印象的に映ったのだろう。

絵が完成に近づいたと思われた次の日の朝、厚く塗り重ねた高価な絵の具を林先生がごそりと削り落としたことも何度となくあったという。先生の奥様からは、星女が1時間以上も動かず片腕を上げたポーズをとっていたとうかがったこともある。複雑な家族関係を背負っていた母は、きらびやかなモデルを演じながらも、どこか憂いを秘め、一方で並々ならぬ集中力を發揮する一途さを兼ね備えていた。そんな彼女を見て、当時50歳を超えていた林先生は「星女」という名前をタイトルにつけた絵を制作して下さったのである。

先生が亡くなる前、連絡を受けて星女は病床に駆けつけた。そのとき先生が「君は本当に綺麗だったね」とボソリと言ったと、帰宅した星女は夫と娘に微笑みを見せずに告げた。そのときの母の横顔は、林先生に迫る死の面影を捉えきれない哀しみをたたえながら、一方で子ども心にもそこにはロマンスの残像を感じたことを覚えている。星女はモンバルナスのモデル、キキのように浮いた話はなかったけれど、林先生の絵の存在が、その後、機織り作家として凛として生きた彼女の自信になっていたよう思う。



制作中の林武と星女嬢 1953年



◆菊地栄さん寄贈の建設社刊「独立美術」 5, 8, 9, 11号(昭和8,9年刊)

『ぜんまい手紡ぎ織 菊地星女展』●2017年10月6日(金)~10日(火)

会場／旧石原家住宅(登録有形文化財、通称:石原邸)

愛知県岡崎市六供町杉本70番地 nagi10sk@yahoo.co.jp

大津英敏が語る

おおつ えいびん
Eibin OTSU

1. 画家を志す + 中学生の頃、当時ご存命だった坂本繁二郎が、夭折した青木繁のことをテレビ等で語っていたのを聞いた。同じ年でもあった、この二人の画家の生涯に強く心を打たれたのも、画家を志した要因です。

+ 東京藝大合格後、山口薰教室に在席。学生の頃は「抽象をやらずんば画家にあらず」という時代的な雰囲気があった。ヴォルス(Wols)にあこがれ、十数点の抽象的な作品を発表している。

+ 第37回独立展に応募し初入選。当時の作風は「毬シリーズ」又は「サークัสシリーズ」と呼ばれるが、子供の頃に見たサーカスに想い当たり、画面に組み立て、曲芸シーンを描いていた。この頃は、ピエロ・デッラ・フランチエスカに心酔していた。

+ 第42回独立展にて会員に推挙された。その6年後、パリに3年間家族と滞在した。それまでの毬シリーズの絵から脱し、新しいテーマに取り組みたい気持ちが強くなっていたからだ。フランス人と同じ生活が出来たことがよかった。車の運転が好きで、BMWを驅ってヨーロッパ中を家族と旅をした。滞仏中に影響を受けた画家はバルテュス。アトリエ近くのカフェに作品があった。また、坂本繁二郎のように、乳白色で幽玄の世界を表現しているモランディにも関心を持ち、「学者のように描けば立派な作品になる」という考え方にも影響を受けた。

2. 何を描くか + 泰明画廊で開催した個展のメイン作品として「KAORI」を展示した。個展中に「KAORI」が安井賞にノミネートされたと連絡があり、審査、写真撮影のため、1日だけ作品を取り外した。安井賞を受賞した。それまでは、安井賞展で賞候補であったが、フランスでの経験を踏まえ、作風を変えることで、評価を得ることが出来た。長女の後ろに横たわるのはパリのヌードモデル。また、画中の部屋は、オデオンのアトリエ。右のドアを少し開けて、奥に続く空間を作った。右側の壁には、鉛筆で描かれただけの扉がある。作品を描くときは、あまり整えすぎない方が、雰囲気があつていいと思うし、学生にもそうやって指導してきた。

+ 「AYAKA」は、次女をモデルにした最初の作品。画中のあどけない次女の足許は、崖になっている。後ろには、室内をモデルに世の中を生きてくことの大変さを表す大人の女性を描いた。そして、次女の左側に崩れたレンガを描いた。このレンガも元は、立方体で、時間の経過を表している。

+ 長男もたまに描きます。描いてくれというので、「髭を剃りなさい」といったが、いうことを聞かない。しかし、テレビの取材が来るよと言うとぐぐに髭を剃った。その作品が「花の行方」。

+ 私は、家族を描いています。家族の成長を通して昭和から平成にかけ



て生きてきた、この世の中のことを反映することが私という画家の役目です。

+ 第28回損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞作品「天と地と」の構図では、宙に浮かぶ長女の姿を描いた。昨年の独立も、今年の十ヶ会も宙に少女が浮かんでいる。最近多く描く構図です。この年に日本藝術院会員に就任。

+ 日本藝術院による社会貢献事業の「子供 夢・アートアカデミー」は、会員が小・中・高校を訪問して、実技指導を交え、会員の経験に基づいた講話を行います。私は、いつもパステルの完成作品を持参して、その作品を見せながら、実際にパステル画を描かせています。

3. 独立展について

+ 独立には、長い間力作を発表し続けているベテランが大勢います。それらの出品者が作品をより深めて行く中で、若い人が次々と出てきて新しいスタイルの作品を発表し、独立の幅を広げ、独立展を更に盛り上げてくれると信じています。

+ 毎年、秋には独立に大作を出品する。5年、10年と繰り返すと画家としていいことがあります。私自身、大きな賞をいただいたのが、ほとんどが、独立に出品した作品です。それを楽しみにやっていくといいでしょう。

1.「KAORI」 2.「AYAKA」 3.「花の行方」 4.「天と地と」
5.熊本の個展作品の前で 6.パステル画制作中 7.ご自宅前で

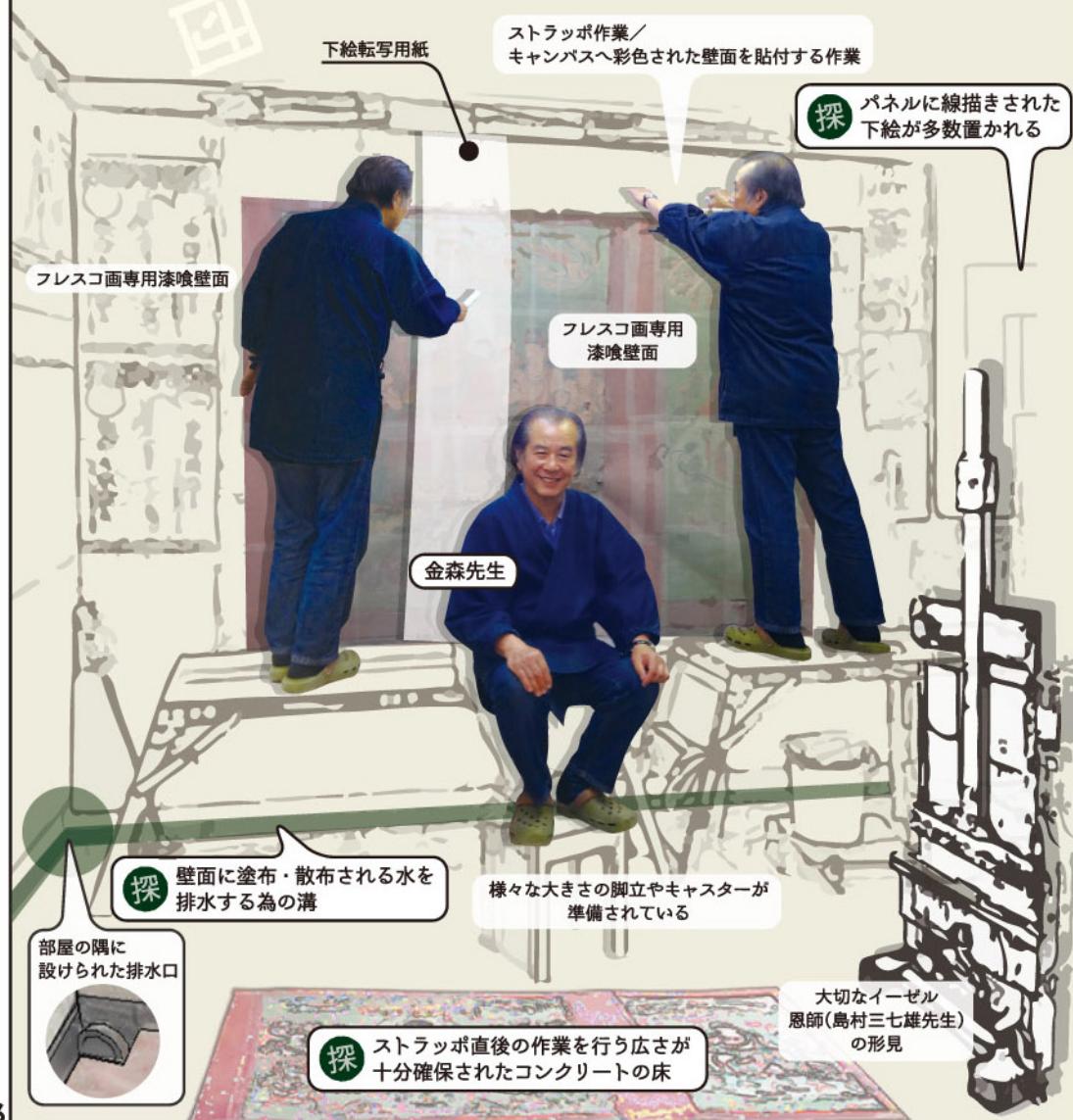


今回は自らのルーツである明日香・大和路の精神世界を、独特の風合いと温もりのあるフレスコ画により探求されている金森良泰先生のアトリエを探検する。

埼玉県春日部市のご自宅から少し離れた、郊外の静かな田園地帯にあるアトリエは、大きく傾斜した屋根が印象的な建物で、屋内にフレスコ画専用の大きな漆喰壁が設けてある。

アトリエ外観

探 玄関ドアを開くと、直ぐに漆喰壁と排水溝が設けられた
フレスコ画専用の部屋がある



探 アトリエ内を飾る仏教関連の品々

特に鬼瓦は、生家の奈良・融通念仏宗法融寺本堂^{*}が改築された際に取り外されたもの。江戸時代に製造された貴重な品。ちなみに中央の鬼瓦は先生お気に入りの瓦である。



*融通念仏宗(ゆうづうねんぶつしゅう)平安時代末期に良忍により開宗された日本で6番目に古い宗派。特に奈良から大阪湾へ向ける富雄川沿いに多い。

探 小品制作用スペース

画材の準備された明るい窓際の制作スペース



探 左ページに隣接する制作スペース

探 200号のサイズの作品にも 対応する大きな作業台

アトリエ内は、履物を履き替えると、すぐに
フレスコ画の制作ができる配置になっている

こちらにも絵具セットが
準備された大きな机

金森良泰 かなもり りょうたい



第48回独立展 独立賞受賞作品



2017年6月 奈良薬師寺聚宝館展示風景

- 1946 奈良県奈良市生まれ
1973 東京芸術大学大学院壁画科修了
1980 第48回独立展 独立賞受賞
1981 独立美術協会会員推薦
2011 紺綬褒章受賞('13,'14)
2017 奈良市薬師寺食堂落慶記念奉納
- 壁画制作 -
1990 奈良県生駒市 安養寺本堂
1995 奈良県大和郡山市 光蓮寺本堂
2009 奈良県奈良市 法融寺本堂
- 現在 -
独立美術協会会員・千葉大学名誉教授

つぶやき生の声

き生の

ぎゃらりいサムホールでの個展も20回を迎えた。
「よくここまで頑張った」
故・斎藤秀先生から頂いた言葉が蘇る。

岡田忠明

人參ジュースを飲んで体の調子を整えていた個展。
批評は沢山聞いて
気持ちちは消化不良の状態。

桜井節子

白い画面に
白い絵を
描きたい
中島伸一

色々な人の批評や感想が
絵を見ててゆくと思う。
己の頑固さは必要だが。

吉原多美枝

純粹に素直に
いつも新鮮な感動を持って
絵を描いて行きたい。
酒井佳津子

最大2点出品になり、
金錢的な負担が減り助かりました！
学生や若手が出品し易くなつたと思います。

坂井一誠

妻が眠る装飾墳墓を
6日間だけ銀座に
作させていただきました。

吉田宏太郎

地方の出品者が、
東京で展览会をやる時は、
関東の会員は応援するべき。

世利徹郎

「毒」立展に向け、
魂を鍛えます。
東田理佐

「終身の楽しみありて
一日の憂いなし」
描けない苦しみも
「終身の楽しみ」の一部。
大友まゆみ

独立大学 20数年生 新人賞。
続けられたのは、
絵に情熱をかける先生、
仲間の存在が大きいです。

加藤泰子

連日 世界でおこる
悲惨な報道を目にしてします。

福井慶子

絵から発する力と観る側が
絵に入り込みたくなる力。
二つの力を持つ絵、
描けるようになりたいなあ

酒井かや子

下塗りは大変で、何層もします。
下塗りがしっかりしていないと、
描写が生きてこない。

目黒礼子

独立川柳
「次の案 田植えしながら考る」
「独立賞？期待しながら稻を刈る」
「友の受賞 笑顔で内心コロコロ！」

伊藤裕貴

私の主張、絵を明快に表し、
訴える力を鍛えていきたい！！

山形牧子

スニーカーが現在、私のモチーフ。
履き古した靴底には人生が重なります。
熊谷美恵

自分が成長すれば
絵も成長すると信じて、
これからも素直に
画面に向き合いたい
兵藤由紀子

今年に入ってから2回入院。
こうした経験も絵のテーマを
深めてくれるような気がします。

藤野春生

昔、幼い孫が私の絵を見て、
これドナルドダック…指しながら喜んでくれた。
その孫が今年で中学生。
私の絵も成長しただろうか？

国重幸子

出品し続ける事は、
自分が思っている以上に
大きな事だと
気付かせられました。

羽賀文佳

独立展は自分が
どのくらい絵を
理解しているのか
確認できる機会！

小野田拓真

今年も独立展に先立ち、会員・準会員・会友・出品者多数が各所で展覧会を開催しました。その折、制作にかかるつぶやきを集めました。どのように本展作品に反映されているか鑑賞の手がかりに、また作家の人となりを知るヒントに。

百合花の薫るさなかの契りゆえ

芽吹きしいのち

風に光らん

前田充代

熱い意欲の
ふつかり合いが生む
独立のエネルギーを
膚で感じる。

吉見照子

東京での初個展…、
トテモ有意義な
一時でした。

森本貞代

誕生というテーマで、
次の世代に繋げる命、
命の連鎖を表現したいと
想っています。

森田慶子

何が何でも踏ん張らないといけない局面、
それが今だとしたら、精一杯踏ん張りたい。

土井久幸

7月は銀座で独立出品者の
作品展ラッシュ！
多くの先生方が回って
指導してくださいます！

坂田幸雅

グループ展をこの時期に始めて13年目、
自分が「よし」と思っていたことが
画面に表していないことに愕然とする。

志津田禮子

子供は私達のかけがえのない宝物。
時代を超えて健やかに明るく
成長して欲しい、これが…筆たらず！

飯田博己

先生方からのアドバイスで、
自分の不要な殻が剥がれていく。
揺るぎない世界を築いてゆけるのか、
考える機会となった。

倉橋完治

体調不良で
3度のお休み。
やめないのは
独立展が大好きだから。

市川光鶴

阿蘇山の自然林の中に、
五感に響くものがあり、
心に響いた情景を表しています。

木上正貴

制作中はいつも不安だらけだ。
しかし、この一筆で明日が変わると
信じてやるしかないのだ。

白藤さえ子

100年後、人はもっと人ではなくなる。
機械化が進み有機的な物が
無機的な方向に進んでゆくことを
絵にしたい

江田晃世

作品はミクロを追いかけ
心は発芽気分
からだはドライフラワー

関口聖子

薄暗いアトリエにて、
この陰影を苦闘している
キャンバスに切り取れないものかと
自問している。

星健悦

久しぶりの個展、
意図の伝わりの
悪さを痛感。

北村倫子

独立を目指して47年。
これからも夢に向かって
走り続けます。

遠山隆義

人は昔、
鳥だったらしいぞ！

大部雅子

抱えきれない位の
贈り物を頂いた
濃い6日間。
活かすのは自分

小島恭子

カレーには水、
乾いた心には独立魂

徳中壽子

新美術館、ミッドタウン、六本木ヒルズを囲む地帯に、ふと立ち止まる場所がある。
「独立展」を見たあとには、周辺を遊歩してみるのも楽しい。

TOTO乃木坂ビル

1.TOTOギャラリー間

建築・デザイン関係者なら皆知ってる
通称「ギャラ間」。

ここでの企画展がすごい！ 内容も展示レイ
アウトも刺激的！

今、ベネチアビエンナーレ国際建築展の
帰国展開催。

下階のTOTOショ
ールームも楽しいんだ
なあ。(浜松)



2.美術館前の段差(石垣)

正門前の窪んだ地形
の横の古びた石垣。
もともと川でもあっ
たのかと思ったら肥
前蓮池藩、鍋島家の
屋敷跡だそうだ。

昔ながらのクリー
ング屋さんがあった
が現在解体されて工
事中。(松原)



3.出雲大社分祠

六本木のパワースポット！

大国主神がおはす出雲大社分祠。
大都会のビルに鎮座するお社があ
ります。

単に男女の縁ではなく、人とのものを
結ぶむすびの神社。

独立の御縁も大国主神がとりも
ってくれるかも！！(浅見)



TOTO乃木坂ビル

1

千代田線乃木坂駅

新国立美術館

4

東京都立
青山公園
南地区

六本木トンネル

5

3

地下通路

マクドナルド

4. 魚真 乃木坂店



国立新美術館から徒歩3分。外壁には大漁旗。1階は、透明シートで覆われ、大きな冷蔵ケースに多彩な尾頭付き。二階は座敷とテラス席。美術館が閉館する頃、テラス席には、ストーブが灯る。魚しかない居酒屋。(米田)

5. デンメア・ティーhaus 六本木店

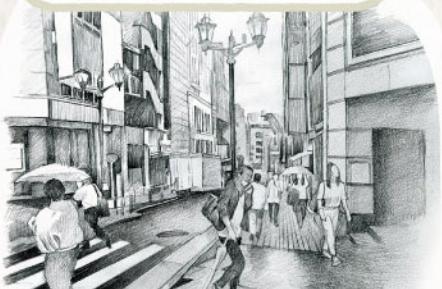


TVの人気刑事ドラマにも登場した新国立美術館近くの紅茶専門店。独立展鑑賞後、お友達とのティータイムはいかがでしょう。(阿部)

6
芋洗坂



6. 麻布警察の近くの 6. 芋洗坂(いもあらいざか)



芋洗坂の地名には諸説あるようですが朝日神社の前で芋が売っていたという説や病氣平癒などいろいろあるようです。餽飴坂(うどんざか)や芋洗坂など場所と地名には様々な由来があるようです。(中村)

独立ホットニュース

美術館紹介 「動く絵」絹谷幸二・天空美術館

絹谷幸二天空美術館は、大阪湾を望む梅田スカイビルのタワー東翼27階に2016年に誕生しました。この近くには「なにわ筋線」の事業計画があり、大阪の今後の発展が予想される象徴的な地域となります。美術館は広く、大作を中心に30点から40点の作品が展示されています。目玉となる作品が多いのですが、中でも3Dシアターのような立体的に絵が見える作品が興味を引きます。これは、会場の中心部分にシンボルゾーンと呼ばれる場所のスクリーン上に映写される作品で、絵が様々に動きながら展開し、専用の3Dめがねをかけると立体的に見えるのです。ふつうの絵画作品の発想からは思いもつかない内容で、新しいジャンルの作品です。とても面白いものです。ぜひ、一度ご覧下さい。



展覧会情報

八王子市市制100周年記念事業

昭和の洋画を切り拓いた若き情熱

1930年協会から独立へ

八王子市夢美術館

2017/9/15(金)~11/5(日) 10:00~19:00

八王子ゆかりの洋画家・小島善太郎、木下孝則、佐伯祐三、里見勝蔵、前田寛治と結成した「1930年協会」は昭和を迎えた洋画壇に新風を吹き込みました。後の「独立美術協会」創立までを大規模に回顧する全国巡回展の最終会場となります。

東京都八王子市八日町8-1ビュータワー

八王子2F

TEL.042-621-6777



佐伯祐三『リュクサンブル公園』
1927年 田辺市立美術館蔵

独立展 初入選・初受賞 84回独立展では、43名の初入選・12名の初受賞！これからに期待します。



●初受賞・井阪文紀
「my phimosis」
(銀保ジャパン日本興亜美術財団賞)
→入選4年目の若い才能に期待



●初受賞・沼田愛実
「silent walker」(新人賞)
→静物たちの物語を聞きたい



●初入選・佐々木泰海
「大地の恵み」
→丁寧な描写を、これからどう活かす



●初受賞・増田典彦
「クロソイドの迷宮」(新人賞)
→独特な構図に漸く色彩がマッチング



●初入選・芦田景衣
「かわいくなろう」
→効果的なコラージュでパワフル



●初入選・浅井薫
「自己天楽」
→力強い構成にも柔軟さを持って



1 多彩な趣味をお持ちとお聞きしました。ご自慢の趣味をお聞かせください。

若い頃から絵を描いて、音楽を聴いて、を繰り返してきました。一頃、オーディオブームというのがあった。デジタルの時代になると、だれでも簡単に音が出る?様になってオーディオ熱はさめる。

音楽、オーディオマニアは、その次に何をやりたいのか?

それがいまの『ハイレゾ』と言う世界です。デジタル技術の先陣としてのCDが一般家庭で使われるようになるのは1980年頃から。人間の耳の可聴周波数外の上下の音を切った規格の音源として音楽が充分よく聴ける範囲の音がC(コンパクトな)D(デスク)に収まっている。

しばらくするとそれに飽き足らない人がSACD(スーパー・オーディオCD)を規格しましたがさらに、SACDでも入りきらない可聴周波数外の重低音や超高音、演奏会場の臨場感?までもを目指すのがハイレゾ音源(当たらずといえども遠からずと思っている私の解釈)ということのようです。

『よしつ!私もそれを聞いてみたい!』と思って、色々にチャレンジします。ところが聞き分けがつかない、『これがハイレゾ音源のベートーベンの運命です』、『これはこれまでのCDの運命です。』と言われても違ひが解らない。

ハイレゾ音源の音楽はインターネットで配信されるのだが、私には、ただ、高い(従来CDの3倍?価格)だけかヨ状態。それは機器のせいもあれば歳(耳)のせいもあると考えられます。

『うーんこれは限界かいいな』と思っていたところ、最近、オーディオ雑誌にオーディオの専門家グループが、利き酒の様にブラインドテスト



制作中の新作 F200号



2014年「○△□」(まるさんかくしかく)200号
日本橋高島屋での個展出品作品

で、ハイレゾ音源か?従来のCDか?と丸でも付けて当てる特集を企画した。

そしたら専門家でも正解は半々です。それなら私もがっかりしないで、これからも音楽への憧れ・再生する音への追求を“楽しみに”やって行けるのかナ!と希望を持った事が自慢?です。

2 今年の作品、題材についてお聞かせください。

川を描いています。キラキラ、水の美しさを描きたくなりました。

3 人生を楽しむ秘訣は何ですか?

希望をもつこと、日常の些細な事に。

- 1939年 池袋アトリエ村生まれ、3歳・父戦死、4歳 祖父を頼って福島県の新地村に疎開
- 1962年 東京藝術大学油絵科卒、64 同大学専攻科修了
- 1962年 第30回独立展初出品、'65 独立賞、'66 独立賞・須田賞、'67 独立美術協会会員推举
- 1979年 個展・日動画廊
- 1980年 文化庁派遣芸術家在外研修員(フランス)
- 1987年 個展・池袋西武アートフォーラム

- 1994年 十果会(以後毎年)
- 2005年 齋藤研の軌跡展・川越市立美術館
- 2011年 齋藤研個展・ギャラリーユニコ(川越)
- 2012年 公募団体セレクション展・東京都美術館
- 2014年 個展・日本橋高島屋
- 2017年 文化庁海外研修制度50周年記念展(日本橋高島屋他)
- その他、個展、グループ展多数



- 1.独立美術協会会員・齋藤求(1902~2003)先生なきあと、めぐりめぐって私は3代目、イギリストンノイ社製のスピーカー
- 2.オープニングのオーディオブース
- 3.廃材を利用し制作した仕事机
- 4.宮城県閡上港産のムール貝

